

教育心理学研究

「クラスサイズと学業成績および情緒的・行動的問題の因果関係」

－自然実験デザインとマルチレベルモデルによる検証－

【 概 要 】

クラスサイズの拡大は、(a)学業成績を低下させること、(b)教師との関係上のストレスには影響しないが、教師からのサポートを減少させること、(c)友人関係におけるトラブル（いじめ、ケンカなど）には有意に影響しないが、相互の援助行動の減少をもたらすこと、(d)攻撃性には有意に影響しないが、抑うつを高めることが示された。こうした影響の広さを鑑みると、クラスサイズは学級運営上、重大な意味を持つ変数であると結論づけられる。

目的	<p>学業成績（国語および算数・数学）に加え、情緒・行動的問題に対するクラスサイズの影響を検討する。</p> <p>*学業以外の側面の指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友人関係および教師との関係上の問題 ・向社会的行動と友人および教師からのソーシャルサポート ・抑うつ（内在化問題）および攻撃性（外在化問題） 			
方法	<ul style="list-style-type: none"> ・2007年度から2015年度までの計9回調査 ・小学4年生から中学3年生（計11,702名、のべ45,964名、1,308クラス） ・小学校9校、中学校4校 ・クラスサイズの総平均 小学校33.99、中学校35.17 <p>※調査対象校では、義務教育標準法と県が独自に定める基準に基づいて、学年ごとの人数によってのみ自動的にクラスサイズが決定されていた。</p> <p>※2009年度に定められた県の基準は中1が上限35人であるため、2009年度以降、中1のクラスサイズがやや減少している。</p>			
調査	時期	各年度の9月（学業成績のみ5月）		
	尺度	学業成績	教研式標準学力検査NRT 国語および算数の偏差値を使用	2009年度以降のみデータを収集
		対人関係	友人関係上の問題の評価：SDQ日本語版の自己評定フォームの「友人問題」の下位尺度5項目	2011年度以降5回
	教師との関係における問題の評価：小中学生用社会的不適応尺度4項目		2012年度以降4回	
	向社会的行動	SDQ日本語版自己評定フォームの「向社会的行動」の下位尺度5項目	2011年度以降5回	
	ソーシャルサポート	小中学生用ソーシャルサポート尺度の「友人からのサポート」「大人からのサポート」各6項目	2011年度以降5回	
メンタルヘルス	抑うつ	抑うつ気分	全年度9回調査	
	攻撃性	身体的攻撃		
分析	<p>調査年度ごとのクラスサイズと学業成績および情緒的・行動的問題の横断的な関連を検討した。</p> <p>*学業成績についてはクラス編成直後の5月に測定が行われたため、前年度のクラスサイズとの関連を検証した。</p>			

結果	方法論的考察	クラスサイズは学業成績や情緒的・行動的問題に全般的に望ましくない効果を持つことが示された。	
	学業成績への効果	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスサイズが10人増加するごとに、平均して国語の得点が0.07SD、算数・数学の得点が0.10SD低下することが示された。 ・本研究を含め、国内の研究におけるクラスサイズの学業成績への効果量は全体的に海外の研究よりも小さい傾向にある。原因は定かではないが、補助教員の配置などの学校内での工夫や学校以外の教育産業の発展度合などの違いが関係している可能性がある。 	
	情緒的・行動的問題への効果	教師との関係性	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスサイズの拡大は教師との関係上のストレスには有意に影響しないが、教師からのソーシャルサポートの減少をもたらすことが示された。 ・教師の時間的・精神的な余裕が減少することで、個々の児童生徒に寄り添った共感的な指導スタイルを取ることが難しくなると考えられる。
		友人との関係性	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスサイズが増加することで、いじめ被害などのネガティブな問題の増加は見られないものの、向社会的行動やソーシャルサポートといったポジティブな行動が減少することが示された。
クラスサイズの拡大は、いじめやケンカのような外在化問題よりも、クラス内の友人・教師との関係の希薄化を介して、ストレスを内側に溜め込む内在化問題につながりやすいと考えられる。			

伊藤大幸（浜松医科大学）他 教育心理学研究, 2017